

加齢研ニュース 第42号

(平成16年12月1日)

[所長室便り](#)

[新任教授挨拶](#)

[分野紹介](#)

[随想](#)

[研究員会便り](#)

[研究会同総会広報](#)

[編集後記](#)

「所長室便り」 帯刀益夫

「国立大学法人東北大学」がスタートしておよそ半年が過ぎた。法人化前と比較して表面的には余り変化が無いように見えるが、国立大学法人としての姿が色々々ところどころ少しずつ顕在化し始めたところである。

法人化後の大学運営では、「役員会」が大学運営に関する最終決定・執行機関としての中心的な役割を果たすことになったため、従来毎月1回定期的に開催されていた評議会に相当する「教育研究評議会」その開催は不定期となり、実際、開催回数も極端に減っている。役員会の運営方針は「部長長連絡会議」を通じて伝達し、各部署の運営がそれに沿って行われることになったが、この会議もこれまでより少なく定期的に開催されることとなった。総長・役員会が中心となって法人化後の大学運営の方向性を固め、安定的な運営をしてゆくまでには未だ時間が掛かりそうであり、この状態がしばらく続くように思われる。

法人化になって大きく変わった点はいくつかある。その第一は、各法人が渡しきりの運営費交付金（人件費と物件費）をもとに経営してゆく形となったことである。とくに、これまでの国家公務員としての教職員の「定員」管理が無くなり、法定每人人件費を適切に管理する事となり、これまでの各部署の「定員」を「配置職員数」として、「配置職員数」を基盤として算定された「人件費総額」の範囲内で運用することになった。16年度の算定方式は紆余曲折を経て、部署毎の現員の人件費の平均単価を元に試算したが、17年度からは全体の平均単価をもとに計算することとしている。また、16年度はじめの第10次定員削減計画はそのまま実行しつつ、さらに全教員の半数がパーセントに当たる人件費を中央管理の人件費枠として扱うこととして、各部署のこれまでで定員枠から中央枠に吸い上げて戦略的経費とすることとした。この中央枠の経費をどのような戦略的経費として使用するかは、これまで役員会等で検討してきたおり、ユニバーシティプロフェッサー制などいくつか提案がなされたわけであるが、具体的にまだ目立っていない。

このような運営方式に従って、加齢研は16年度新たに加わった附属以外フオムリサーチセンター（学内共同利用施設の遺伝子実験施設を統合し変更）を含めた配置職員数51名から中央枠管理2名を減じた49名を、中期計画年度中（6年間）の加齢研の「配置職員数」としてスタートすることとなった。また、法人化により、これ以後の国家公務員の定員削減措置から免れると考えられてきているが、法人に対していつわゆる効率化係数が掛けられることにより、16年度から中期計画年度内に毎年1%程度（人件費、物件費ともに）の削減を課せられたこととなった。このことは、国立大学法人化が、やはり政府の行政改革の一環として行われていることの実践の一例となってきたことを示すものといえる。これに対応した加齢研の総人件費の1%を削減するため、結果として教員の雇用を減らさなければならぬ事態となり、今後、これに対応したシミュレーションを行い、雇用計画を考えてゆかなければならない。このことが全体として大学の将来計画に顕微鏡向をもちたさえないように、より弾力的な運営が必要となっている。また、法人化により教職員は非公務員型となったものの、国家公務員制度を継承する形を取っており、これも当面大きな変化は無いものの、教職員の人事制度や就業規則が制度上変わることとなった。大学として新たな就業規則案を策定し、過半数代表者と労働契約を締結する形を取り、4月1日から新たな就業規則のもとでの就業体制となっている。給与、公務員給付に対する人事院勧告で寒冷地手当支給が大幅に削減され、とくに仙台地区は対象外となることとなった。本学職員の給与体系は非公務員型となったものの、基本的な公務員給与を大幅に引き上げるため、過半数代表者との話し合いを経て、人事院勧告に従うかたちで進めたいと考えている。今後は、本学の教員の身分、給与関係、停年制度など大学法人としての新しい人事制度、本学独自の施策を検討する必要がある。現在、役員会等が中心となって検討しているようであるが、新たな構想を提案するまでには到っていない。法人化とともに、安全衛生法上の義務も強まり、各部署がそれぞれ事業所という形を取り、安全衛生委員会を設置し、教職員の勤務上の安全衛生に留意し、対応措置ができるようが必要となり、加齢研としても、安全主任者と産業医が毎月所内へ安全確認と健康管理を行い、毎月安全衛生委員会を開催して点検確認を行っている。

加齢研の組織運営については、4月から、所長、副所長を中心とする執行機関として運営会議を設置し、総務人事、財務、研究推進、将来計画の4つの常置委員会とともに新しい運営体制となった。しかし、多くの課題について教授会、専任教授会もこれまで毎月1回開催しての審議を行ってきたおり、新しく運営の簡素化ができてはいない。面談、法人化のシステムが安定化することができると、色々と変化する情報についての伝達と構成員の意見の集約など、これまでの体制を継続する上でスムーズな運営ができるようにしたいと考えている。

最近、加齢研のホームページの刷新を行ない、研究所の活動や研究方向を理解してもらえるような形にし、新しい情報を逐次提供できるように更新しゆくこととしている。また、現在、研究所概要なども新しい情報を取り入れて作製するよう進めていたが、片平祭りの事業に対して加齢研がトップジャーナルに掲載されるような新しい研究成果も多くなりすぎており、その中から成果をホームページで解説したり、鋭意マスコミなども通知して公表してゆく体制も整えてきている。10月10日、11日には片平祭りとして3日目の加齢研の一般公開も行われた。研究所のみならずは展示などの準備と、当日は休日返上で対応していただいたお蔭で、2日間で約900名の市民、学生などが加齢研を訪れ、展示や公開実験を楽しんでゆかれたとともに、市民の方からは大変よい評価をいただいた。片平祭りの事業に多くの時間を割いていたいただいた方々にお礼を申し上げると共に、こうしたことも、大学が社会に対して情報を提供し、理解を得る上で大切なことと考えられる。全国の国立大学附属研究所や全国共同利用型の研究センターについては、法人化後は各国立大学法人の一組織としての性格が強まり、また、国立共同利用研究所は別の法人としてまとまることになり、日本の学術研究体制の上から附属研究所の位置付けも大きく変化するに違いない。そこで、全国の国立大学附属研究所・センターの所長会議も法人化後の新たな組織体制を整えて、こうした動きに対応すると共に、附属研究所等の活動を各大学院、あるいは社会にアピールしてゆくような活動を開始し、ホームページの立ち上げや、社会向けの公開シンポジウムの開催など新しい試みを行っている。

医学部と歯学部の改組策や1部局として一体化した運営ができるような組織体制作りについて審議が進んでいることが大きな課題となっているため、その改善策や、1部局として一体化した運営ができればいいという趣旨を強く訴えているところである。臨床系部門が病院内診療科を持っている加齢研としてもこの組織運営に対してこれまで以上に組織的にも協力して行くこととなり、加齢研の教員が病院長選挙においても選挙権を持つことなどいくつかの変更が行われており、つい最近行われた病院長選挙から選挙に参加することとなった。

こうした法人化後のいくつかの具体的な動きもあるものの、法人化対応のために多くの労力を費やしてきているため、大学として長期的な視野に立った将来計画の策定などいっかあできない状況に陥るとともに、加齢研は改組しないからすでに10年を経過しているのて、研究所の見直しや将来計画など将来的な課題についても改めて考えて行かなければならない状況にある。

法人化後はこれまでどのやわゆる概要要求のような形でもなく、法人化後の運営方式の要約もがあるため、今後の方向性を明確にしておく作業は非常に難しく、高齢化社会を迎えて、加齢研の方向性の正しきや社会的な制約はより強くなっており、大きな東北大学としては、この研究の先進性をいかに実質化し、研究所の評価を高いところに定着させてゆくことが重要と思われる。東北大組織として、21世紀COEや先進工学機構などを重視し、新たな大学院を設けてゆく計画もあり、最近、工学研究科等の設置に向けた検討委員会も設置され、その取り組みも始まったところである。また、ゲノムサイエンスを中心として生命科学研究所が大きな転機点を迎えており、これらに対応して新しい研究教育体制を整えてゆくために、加齢研としても本学のライフサイエンス研究教育の在り方を見直し、関連の組織との連携や組織再編も視野に入れて考えてゆく時期にきていると思われる。

以上、法人化後の状況をいかいつまんで述べてきたが、今後も引き続きよりよい研究教育環境を整えるべく対応してゆきたいと考えている。

「新任教授挨拶」

就任御挨拶 医用細胞資源センター 松居 靖久

8月1日付けで、医用細胞資源センターに着任致しました。どうかよろしくお願ひいたします。

- 発生を細胞レベルでみる

私の研究に関する興味の持ち方をひとことで言うとは、発生を細胞レベルで見ると、ということになります。発生を研究するには多くの切り口があります。例えば、遺伝子の欠損が引き起こす異常を個体レベルで調べる遺伝学的なやりかたや、特異的な遺伝子発現を引き起こす分子のつながりを調べるアプローチなどが盛んに行われています。私もそのような方法を駆使して、最後には発生の分子機構を解明したのですが、その前にはまず正常な胚発生過程で起きていることを、生きながら細胞レベルで観察したいという思いがあります。見ることには理屈を越えた感動があるとともに、メカニズムのヒントが得られる場合も多いと感じます。

私は大学院の学生だったこと、赤血球の分化機構に関する研究をしてみました。白い細胞が分化して赤くなるのを見ると、細胞分化を直感的に理解することができます。そしてその分化機構に関するには細胞のなかでどんな生掛けが動いているのか、という興味へ発展します。学位取得後、米国の留学でも、血球の分化機構の究極は、いろいろな血球細胞に分化する幹細胞の分化制御ですが、さらにさかのばれば、胚発生、受精期に行き着きます。当時、哺乳動物の胚発生がどんなものかあまり理解していませんでしたが、より上流を見てみたいという漠然とした思いがありました。留学先のボスは、マウス胚をこよなく愛している人でした。ポスドクや学生が胚を取っているのと、私もやらせてとやってきて、喜々とあれこれ説明してくれました。私には、マウス胚のイメージとよく比べて、彼女のそういうあり方が印象的でした。このようにして振り返ると、私の今の興味や、研究を始めて二十年の間に偶然出会った何人かの人たちの影響を受けて育ってきた物であることを改めて感じます。

- 研究の作り方

私は学位取得後2年間と、留学から帰国後の6年間、加齢研で研究に従事しました。今回赴任して、過去2回の赴任の時と比べて、何となく周りが変わった見え方のような気がしました。学生からポスドクまでの期間は、今になって思うと自分の場合は、お客さんだったと思います。帰国後、加齢研に助手として赴任して、初めてそれまではだいたい違う状況に置かれ、その6年間と、その後、戻した先の大阪でのことに6年間でも、もたず前回のすべてをある程度は学んだのではないかと思います。私の場合、興味を共有する人たちがあれこれ話をしながら、一つの研究を作り上げていくというのが、今、楽しく感じられます。ここ何年間か、私は時々周りの人たちに、お互いにレスポンスすることが大切だ、といったことを言いました。個性が勝負の研究では、個性がぶつかり合うこともままありますが、それは研究室のボスと学生の間でも例外ではありません。そのような中でレスポンスしあうことは、容易でないこと多いのですが、お互いに自分をうまくコントロールできれば、その結果として得られるものは大きいと思います。

- 違う土地に住む

私の生位を取るまではずっと東京で暮らしていました。ごちゃごちゃしていますが、常に発展している感じがおり、私にとって魅力的な街です。その後は、海外を含めて東京の外で暮らしています。時々東京に戻ると、家にかかっていたような感じがありますが、その一方で、私は違う土地に住ぶこともまた楽しく感じます。期間での暮らしは特に深に印象に残っています。気候、風土、人との接し方等、いろいろなことが日本と違って、少々くも3年半の間では全体としてみて自分には心地の良いものだったという気がします。また、違う環境なおかげで、自分の良い部分、悪い部分が見えてきたように思います。このことは帰国してから12年経つてみて、自分にとっていやな部分は増えたと思います。留学している間に日本では、バブル崩壊、昭和天皇崩御といった大きな出来事がありました。が、なぜか遠くは異国との地の出来事のように感じられました。

以前、仙台にいた6年間は、いろいろな面で余裕が無く、正直言って仙台に生活していたという実感がやや希薄です。子供がまだ小さかったりして、時々遊びに行った郊外の公園や近所を散歩したとき等の、断片的な風景が印象に残っています。大阪での研究所に着くとじんまりしていて、時々可愛いわど小回りが効くようなビルがあたりでしたが、加齢研の多様な色感が懐かしく思われました。この文章を書いている今は、主に大阪にいる時間が長いこともあり、大阪の印象はまだうまくまとめられませんが、もっともインパクトが強いのはやはり言葉だと思います。自分の周りにも関西弁を話す人は多いですが、電車の中でその話を聞いたりして、関西弁が強いこと、なぜかそれではかみているようにも、自分の実生活と距離のある世界を見ているような感じが時々てきます。おそらく、自分自身が関西弁を話せばさのように感じることも無くなるでしょうし、嫌いではないのですが、関西弁を話すまでにはいつにに至りませんでした。

- 生殖細胞の魅力

　留学期間の半ばにさしかかった頃に、ボスが他の研究室との共同研究を持ってきたことをきっかけに、マウスの生殖細胞の研究を始めるといふことになりました。マウスの発生を理解したいという目標を持って留学して、それまではこの目標に近いことばかりだったのですが、ボスが論文をやりたいのでもしろういテーマをちょっぴりとい言いつけました。ポスドクなんだし、そんなことは自分で切り開くという感じで、ボスは大体は不機嫌でしたし、それはもつともなことです。しかし、何事も粘りは肝心で、特に米国では、私が感じたこと入は、言った方が勝ちという部分もあり、この時は結局、良い方向に向かいました。初めはマウス胚の中の始原生殖細胞の増殖因子から入りまして、やがて始原生殖細胞が初期胚に存在するどんな細胞にも分化できる多能性幹細胞に容易に変化することを見つめました。受精卵やそこから発生していく初期胚の細胞は、どんな細胞にも分化する幹細胞を持っています。一方、生殖細胞は卵細胞という特殊化された細胞にのみ分化でき、直接体細胞に分化することはないので、その意味で両者は異なっています。しかし卵細胞は受精卵が生が進むことにより多能性幹細胞を生み出す力を持っており、また始原生殖細胞は培養条件により多能性幹細胞に簡単に変化するところから、これらの細胞は密接に関連していると考えられます。多能性幹細胞から生殖細胞が生まれ、それが再び多能性幹細胞に戻る時、細胞ではどのようにして起こっているのかと思います。またそれらの手がかりが得られると、今度は体細胞と比較して、体細胞はなぜ体細胞なのかかわかるかもしれません。このようなことを興味を中心に据え、研究を進めていきたいと思っています。

「新任のご挨拶 ゲノムリサーチセンター 山本 徳勇

高齢化社会に対応したポストゲノム研究を推進するために、本年度より旧遺伝子実験施設が加齢医学研究所附属ゲノムリサーチセンターに改組されました。これに伴い、私は新たに加齢医学研究所の教授として加えていただくことになりました。私は平成4年より旧遺伝子実験施設の教授をしてまいりましたが、加齢研の新人教授として、ここに改めて新任のご挨拶を申し上げます。

私は東北大学農学部4年生の時、栄養学講座の木村修一先生の指導を受け、実験するようごをを知り、研究者としての道に進みました。宇都宮大学農学部修士を経て、1979年に京都大学医学部医学科教室に入り、沼正作先生の指導で博士研究を4年間行いました。

　沼先生は臨床医学修成でノーベル医学生理学賞を受賞したフェオドール・リゾフのもとに留学し、徹底的に鍛えられた研究者でした。そのために指導は厳しく、「きついな」の一語につきまる大学院時代を過ごしました。私は大学院に入つて3日目に、沼先生より、「君、もう大学院をやめなさい」と言われた。当時、私は大変な思いをした。研究室は空室での中半減期がわずか30秒という不安定な酵素で、それをやみくもに材料にしたことに対する言葉でした。私は大変なショックを受け、この言葉が目が覚めたというより、自分で怒り、それをばねに徹底的に酵素の安定化に努力しました。いったん安定化に成功した酵素は簡単に精製することができ、最終標品は空室にどんなに長く放置しても失活することはありませんでした。この体験より、先入観や思い込みは道に曲がらないか、最終的にはやむを得ないことを学ばすことができます。沼先生は常々私たちに「自分のため、脳みろを思いい。知識を求め」と語り、ご自身はまさにそのまます実践されていました。1992年9月15日に沼先生は研究途上で亡くなりましたが、その死の床でまで、研究を貫こうとしました。沼先生のように、研究のために生き、死ぬことができたなら、研究者として幸せであるかと思われま。しかしながら、自分が沼先生に初めて出会ったころの歳になって、なかなかできることではないと実感しております。

　その後、1983年にガラスのテキサス大学ヘルスサイエンスセンターのゴールドスタインのゴールドスタイン研究室に留学し、3年半ポスドクとして過ごしました。ゴールドスタインとブ라운は血中のコレステロール運動体である低密度リポタンク（LDL）を結合するレセプターを発見し、同時にこのレセプターの異常が家族性高コレステロール血症と呼ばれる人類で最も頻度の高い遺伝病の原因であることを証明し、85年にノーベル医学生理学賞を受賞しました。

　ゴールドスタインとブ라운の研究室での私の発命はLDLレセプターをクロニングすることでした。LDLレセプターの分子量は16万と大きいため、当時は多くのアメリカ人ポスドクが躊躇したテーマでした。私は当時ローニングで世界に怖れられていた沼沼自身ですることでしたが、クロニング自体にあまり難しさを感じず、まったく躊躇しませんでした。実際、時差ボケが回復する前にクロニングすることができました。

　ゴールドスタインとブラインの最大の特徴は独自の発想や研究の進めかたの獨創性にあります。それは二人三脚で30年以上共同で研究を続け、今でも、世界をリードする研究者であります。彼らの研究の極めてユークンな点は、病気の原因を深く以上でいることです（disease orientated research, DOR）。DORという概念は彼らのオリジナルな発想で、現代の医学研究で最も重要な研究のスタンスであると思われま。

　1986年の秋に、私はガラスを後にして、設置間もない遺伝子実験施設の助教授として、仙台にまいりました。以来、独立した研究者としていろいろなテーマに手をを出してきました。沼研で精製した脂肪酸活性化酵素やゴールドスタイン、ブラインが手を出さなかったLDLレセプター以外のリポタンパクレセプターなどをクロニングしてきましたが、どれも中途半端に終わっているのが正直なところでございます。現在は、LDLレセプターファミリーのLRP5に焦点をあててdisease orientatedスタンスで研究しています。

　独立した研究者として20年近く研究してまいりますが、遙か沼先生やゴールドスタイン、ブラインに及ばないというの実態です。今後、一層の努力により、一歩でも彼らに近づけたらというのが、私の現在の心境でございます。

皆様の一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

「分野紹介」 分子神経研究分野

分子神経研究分野は生命科学研究所脳構築学分野と2つの顔を持っています。私と触れる渡邊裕二が生命科学研究所、助教授の舟橋淳一が加齢研分子神経が本務です。後ポスドク人（生命科学）、医学系研究科学生4人、生命科学研究所学生4人、技官、秘書で構成されています。ラボは形の上下ではキマつていますが、実際は一つのラボとしてままとらえています。そのために実験生学的手法を用いることもありますが、それは基本的に「常に胚に戻って考える」ということを心がけています。思い通りに実験生学的手法を用いることもありますが、分子神経発育のものとしてはエレクトロロレセプション法があります。これは、名古屋大学の村松先生より可能性が示されましたが、自分で分子がモノトリー胚への遺伝子導入のための条件が設定されました。最近、siRNAの導入により遺伝子がKOもできるようなことから、さらに可能性が広がっています。モノトリー胚では遺伝子の強制発現、機能阻害実験ができにくいために、発生生物学の研究材料としての価値が下がっておりますが、この方により発生生物学研究の実験動物としての地位が復活しました。エレクトロレセプション法はマウス胚へも応用されるようになり、発生学研究のルーチンなテクニックとなっています。

このような方法で、分子神経では「中樞神経系の領域化」「神経回路形成」「ニューロンの移動」「発生におけるシグナルとその細胞内経路」「耳の発生」の研究を行っています。

領域化、「耳の回路形成」の研究では発生初期モノトリー胚の脳胞にエレクトロレセプション法によりいろいろな遺伝子を強制発現させることにより、非常に面白いことがわかってきました。まず、脳胞の発生運命はそこで発現している転写因子の組み合わせによって決まることから、前脳前部と中脳後部脳境間はオーガニザイア活性をもっており、そこから発現される領域化転写因子の発現を変えたか安定化したりすると影響を受け、その近頃の領域の発生運命を決定するというところ。中脳といはFgf8がOx2、En1, Pax2といふ転写因子が重複して発現している領域で、そこにPax3/7の発現が加わると視蓋として分化することになります。このうち、Fgf8, En1, Pax2はその発現に関して正のパターンバックアップを形成しているのです。そのうちのいずれかを間脳に発現させると、そのループが回り、それらの遺伝子が発現するようになる。間脳ではOx2遺伝子は内在的に発現しているので、結果的に異所的な中脳が発現することになります。このようにして中脳での発生運命を後脳に変えたり、後脳の発生運命を中脳に変えることができます。血球系などは細胞単子で考えればよいので運命転換といえることは理解しやすい。しかし脳の場合には領域全体のプログラムが変わってしまふシステムです。まだそのメカニズムに関しては解析が始まっていないが、非常に面白いシステムだと思っています。

最近ではスライム培養系を用いて、神経細胞の移動を可視化する研究も始めています。モノトリー視蓋は16層の構造を持っており、ニューロンの移動様式が最近顕在されるようになりました。哺乳類大脳皮質での細胞移動は現在盛んに解析が行われているところですが、視蓋での細胞移動は哺乳類大脳皮質でのそれとは違うようなので、新しい細胞移動のパターンの発見、メカニズムの解明へと続く可能性があると思っております。

シグナル系としてはFgf8のシグナルが細胞内でのように処理され、次の遺伝子を活性化するかということ、活性化される遺伝子は何かということ、発生系で非常に重要なsonic hedgehog (shh)の新しいシグナル伝達経路の研究、視蓋で特異的に発現している受容体のシグナル系の解析などを行っています。

また、舟橋グループはゼブラフィッシュを用いて内耳発生の研究を行っています。ゼブラフィッシュは胚が透明であるので、側頭骨に覆われて複雑な形態形成過程となる耳の発生の研究には特に威力を発揮するようになっています。

ラボでは春には新人の歓迎会を兼ねた花見、秋には芋煮、冬にはスキイ合宿などを通じて親睦をはかっています。

文責：仲村 春和

「随 想」 ピュー・ポイント 佐竹 正延

怪我をして1カ月間の入院生活を経験しました。医学部を卒業してより基礎医学に従事しておりましたので、30年ぶりに足を踏みいった、いえ、正確には大腿骨の骨折で少しですがことは通わず、担ぎ込まれた病院での生活です。当然、ナースやドクターの職務ぶりを見聞れることとなります。そして思いつくことでより身近な存在は、フッシュ・ギルであれ年輪がバサツンとあれ、看護婦さんでした。点滴・お薬に限らず、動けない時の排泄物の処理から食事まで、何から何までお世話になります。従って医師よりかは看護婦さんの名前をお忘れずに覚えてしまえ。頭のとてべんから爪先まで純白人の腕とて、キレキレと曲々可愛見せながらには、ヘミングウェイの主人公が恋しているは無理かなぬものがあると、昔、読んで小説も思い起きます。当方は、シメ・シラ、ヘミングウェイの友人が恋しているは無いかぬものとしてはお聞きつけました。そして時間的には午後1時過ぎです。屋敷飯は5分くらいでかき込んだらどうしよう、家庭に帰つた夕食は10時過ぎた夜のことと入る。そして午後6時過ぎ。そして時間日如火曜と木曜2日。ドクターといえども2時間は忙しいことになり、また退院後の通院は、病棟ではなく外来です。ここで目にするのは当方も含め患者さんの大群。待つこと2時間、診察は5分。であっても外来担当医は必死に打ち解けなければならない誤で、9時開始としたも終了は午後1時過ぎ。その外来も2日に2日。うん、これだけドクターの週間予定表はかなり詰まってきました。その他、病院回診も、当方にとっては1分でも50人の患者さんがいたなら、1時間はかかる。ばかりじゃない。ドクターがボクバテを持っていたことも思い出します。患者さんに異変がおれば、夜中であろうと週に1〜2回は呼び出されているのかもしれませんが、そんなこんなを合算すればドクターの日常は、忙しいなどという生易しい表現では足りないのではなければ、とも想像できます。

このうちろや、アラム不思議。現実に戻った入院中の私の、ドクターとのお付き合いは先にも申しましたように、回診時15分間のベドの上のみ。つまり私は、みるみる元気に戻りましたが、ドクターの心からのおなごき合ひということになりました。その日は良い時のアサインの上では、論文書きに精を出しておりました。その言えば教授の任に着いて以来、私の仕事といえば論文書だけでした。毎日、何かを書いては直しての論文に。論文完成は教授の職務中ですが、文字通り心血を注いでいるといっても、普通ではありません。この時、1つ論文に1〜2か月かかるとしてその間には、実験を担った学生さんとの対話が密になります。しかし、得てよ。1人の学生さんが大学院時代に完成する論文は1〜2報。すると学生さんからすればその院生時4〜5年の間に、教授が目を向けてくれるのはたったの1〜2か月に過ぎない。という、何だかに妙です。

患者さんでは病状が重くなるほどドクターに用があり、それが成果を出すほど教授に用がある。自分の自分のろになったし、かつては学生であり、現在は教授、あるいは看護士として不思議な存在、それがドクターということではないか。

「研究員会便り」 研究員会委員長 安部 まゆみ

委員長就任は9ヶ月が経ちました。会員数はH16年度10月1日現在で182名(助教授11、講師5、助手35、研究員16、院生93、研究生2、留學生15)とH15年度末に比し、総数で12名増加しています。

活動状況ですが、学術活動としては、集談会での発表コンテスト2件、研究員会セミナー3件、研究員会主催退官教授記念講演1件、顕微鏡セミナー1件を主催いたしました。

発表コンテストは1月30日の第121回集談会で第4回を行い、中村賢先生(遺伝子導入)と鈴木孝幸先生(神経機能情報)が受賞され、賞状と賞金をお渡しました。6月26日には第122回集談会と第2回を行い、笹原洋二先生(発達神経態)と関根一光先生(病態計測制御)が受賞されました。

研究員会セミナーは3月5日に渡邊裕二先生（分子神経学）のご紹介により、国立遺伝学研究所・集団遺伝学部門の岡山健夫先生、8月9日には同じく渡邊先生からのご推薦により、SEKENの下野智美先生、9月1日は内田隆先生(病態鑑別構築)からご提案された癌研究学会研究の今村健志先生を講師に迎えて、リゼナを主催いたしました。残念ながら、H16年度も研究員会セミナー申し込み件数が少なく、現在のところ上記の2件のみです。このままでは、執行額が予算を大幅に下回ることになり、H17年度予算は減額することになりそうです。是非、企画立案して事務局までご連絡下さい。皆様のご協力をお待ちしております。

H15年度退官の教授は、お一人で、3月26日に医用細胞資源センターの藤原忠雄先生の退官教授記念講演で最後の講義を拝聴いたしました。退官という言葉は淋しい響きますが、先日、福岡での癌学会総会で元元氣そうな工藤先生にお目にかかりました。退官後もご活発に行っているいらっしゃるようです。

オンラインとその共催の顕微鏡セミナーも3回目を数えます。毎回盛況で、今年は5月18日に仲村春和教授（分子神経）のご紹介で、理化学研究所の宮脇敦史先生を講師に迎えて行われました。

化学研以外の活動ですが、各分野の委員による定例委員会を毎月行い、予算、行事などについて話し合いをしています。5月20日に研究員会総会と新人会員歓迎会を行いました。どちらともこれまでに無い多数の方の参加を得られ、用意した事務局とりまして嬉しく一日となりまして。

今年のサマー大会は、9月22日に勝山ポールにてボーリング大会を行いました。多数の参加者を得て、また担当委員（遺伝子導入の海部知朋先生）の賞品運びのセンスが受けて、大いに盛り上がりました。ボーリングがこれのことの定番ですが、アンケートによりまして、これ以外の種目では、フットサル、ソフトボール、卓球に票が集まっていて、ボーリングとは僅差でした。次回はアンケートを元に種目を決定しますので、回答のほうよろしくお願いします。今回も教授の先生方の参加が少なかつたのが残念です。教授の皆様、秋の日的一天をご自分の分野以外の、同じ研究所のメンバーと共に楽しく過ごしてみませんか。

今後とも、総員会が会員の庶務生活に少しでも彩と実りが添えられる事を願い、皆様の積極的な参加を期待いたします。

「研究会同総会広報」 庶務幹事 藤原 正延

庶務報告

- 研究会同憲会委員の確認（平成16年11月）
 - 通常委員 79名
 - (名誉会員70名、所外510名、所内199名)
 - 賛助会員 31施設
 - 購買会員 20件
 - 物故会員 1名(平成16年6月～11月)
 - 平岡 仁先生 平成15年10月 5日
 - 太田 早苗先生 平成16年 1月28日
 - 片倉 康博先生 平成16年 9月13日
- 加齢研ニュース24号発行
 - 平成16年6月
- 第122回集談会
 - 日 時：平成16年6月26日(土)午後1時から
 - 場 所：加齢医学研究所大会議室
 - 一般口演（7題）、山家智之新任教授特別講演

4.平成16年度加齢医学研究所研究会同憲会総会、講演会および懇親会

- 日 時：平成16年6月26日(土)集談会終了後
- 場 所：総 会 加齢医学研究所大会議室 午後4時から
- 講演会 加齢医学研究所大会議室午後5時から

「右と左の科学、分子から結晶、生物個体まで」講師 黒田 玲子先生

- 懇親会 プロジェクト総合研究棟(旧加齢病棟)論議室 3号 午後6時15分から

5.第32回加齢研シンポジウム・特定領域研究賞のパターン形成シンポジウム

- Symposium on Vertebrate Brain Pattern Formation
- 日 時：平成16年10月29日(水)午後9時20分から
- 場 所：加齢研大会議室
- 代表世話人：仲村 春和

今後の予定

- 第123回集談会
 - 日 時：平成17年1月28日(金)午後1時から
 - 場 所：加齢医学研究所大会議室
 - 一般口演、新任教授特別講演
- 第33回加齢研シンポジウム
 - Oncogene Addict：がんにおけるgain of functionシグナルと分子標的薬
 - 日 時：平成17年1月14日(金)午後1時から
 - 場 所：具隣会館 記念ホール
 - 世話人：貫和 敬博
- 第34回加齢研シンポジウム
 - 「バイオインフォマティクスと加齢医学」
 - 日 時：平成17年2月24日(木)
 - 場 所：加齢医学研究所大会議室
 - 世話人：佐竹 正延
- 第35回加齢研シンポジウム「再生医療最前線」
 - 日 時：平成17年 3月 4 日(金)
 - 場 所：加齢医学研究所大会 議室
 - 世話人：山家 智之、堀 義生
- 第124回集談会
 - 日 時：平成17年6月18日(土)午後1時から
 - 場 所：加齢医学研究所大会議室
- 平成17年度加齢医学研究所研究会同憲会総会、講演会および懇親会
 - 日 時：平成17年6月18日(土)集談会終了後
 - 場 所：総会 加齢医学研究所大会議室
- 加齢研ニュース発行
 - 42号 平成16年12月
 - 43号 平成17年 6 月

「編集後記」

東北大学が国立大学法人となつて半年ほどが過ぎました。皆さんにとって、この間の変化は良いものでたでしょうか、それとも……?

ともあれ、おかげさまで法人化後2号目に当たるこの号も発行することが出来ました。今後ともご寄稿などのご協力をよろしくお願ひいたします。

舟橋淳一